

Title	ある修道尼のロールシャッハテスト解釈
Author(s)	氏原, 寛
Citation	大阪外国語大学学報. 51 p.75-p.91
Issue Date	1981-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80820
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ある修道尼のロールシャッハテスト解釈

氏 原 寛

An Interpretation of a Rorschach Protocol of a middle aged Nun

Hiroshi UJIHARA

The author presents an interpretation of a Rorschach protocol of a middle aged nun, probably in menopause. She confronts with the turning point of her life. The result of the test reflects vividly her present situation. We can not decide whether it comes from her special condition as a nun, or it is derived from her specific personality. But, generally speaking, her protocol shows, the author thinks, fairly clearly the problem of women of same age group. The author presents this report as a material for people to discuss the effectiveness of Rorschach test, because we can not make a fruitful discussion on Rorschach test without basing on the concrete interpretation of this test.

1. はじめに

ロールシャッハテストについて、その解釈の恣意性や主観性がうんぬんされるようになってからすでに久しいが、その臨床的有効性については依然として根強い“信仰”のごときものがある。そのことの当否はとも角、ロールシャッハテストの結果何が明らかとなり、実際の臨床場面でそれがどのように活用されうるかについての生まの資料は、まだまだ充分といえないのではないか。その理由の一つは、実際のロールシャッハテストの解釈例に基づく論議がほとんどなされていないため、と筆者は考えている。そのためにも今までにいくつかのテスト解釈を報告してきた（氏原1970, 1980）が、今回、ある修道尼の解釈例を報告するのも、そうした論議のための材料をさらに蓄積する必要があると思うからである。

なおこのレポートは、ひき続き報告するTAT解釈例と対をなし、いわゆるテストバッテリーとしての効用を示そうとする狙いをもっている。筆者としては、ロールシャッハとTATの探ろうとする人格の層には明らかな相異があり、両者を総合することによって一層ビビッドな被験者の人格像が明らかになるものと考えている。

2. 症 例

症例は40代なかばの修道尼である。高卒後ある修道会の経営する幼稚園を手伝い、その後21～2才で修道院に入った。25才頃体をこわして家に帰り、その間某大学精神科に通院した。父は技術者。姉2人弟1人はいずれも結婚している。本人、修道院ともども今後のあり方について考えたいということでTATと共に本テストを実施した。TATの解釈結果についてもいずれ報告する予定(印刷中)である。

3. プロトコル (スコアリングはクロッパー法によっている)

I カード 3秒。コーモリそうですね(笑う)。チョーチョでしょうか。カブトムシが飛んでいるのはこんな姿かと思ったが。60秒。

[質疑] ハネを広げた感じ(D₂)。鋭い(d₃)。ハネを広げて。前の修道院にいた時、足にひっかった時にこういう感じ。こういう感じの鋭い吸盤をなかなか離すことができなかった。飛んできるとこ。ハネがすばまってる姿を漠然と見てる。

しいてこじつけた感じ。アゲハチョウが広げた時、大きいハネがこういった感じに広がる。

カブトムシがツノ、触角とれてるの見たことないが。(カブトムシとは?) この触角。しいて見たのだが。私、想像力ないから。

1. W	FM	A	P	1.5
2. W	FM	A	P	1.0
3. W	FM	A	P	1.5

II カード 10秒。何となく人間の内臓の感じがする。他に別に。何か無気味な感じです。30秒。

[質疑] ここ(D₃)が胸部に見えました。何となく肋骨のような。別に線も入っていないが(指でなぞる)。何となく腎臓(D₂)。形似てないが。よく知らない。

1. W	F	AC		1.0
------	---	----	--	-----

III カード 5秒。人が何かしてるんでしょうか。よく子どものマンガにトリの擬人化したそういう感じにも見える。それ位で。40秒。

[質疑] 頭(d₂)。手、足(D₃)。挨拶でもしているのか、仕事でもしてるのか。(男? 女?) 考えないが、男のようでも女のようでも。スカート、蝶ネクタイ、ハイヒールはいてるようにも見えますし。よくこういう挨拶の絵がある、子ども本なんかに。別々でなく一緒。人間よりも擬人化されたトリ。

1. W	M	A	P	1.0
------	---	---	---	-----

Ⅳカード 15秒. 何にも浮かばない. ゴリラの後姿みたい. 40秒.

〔質疑〕 頭 (d_2), 足 (D_2). 昔, 子どもを動物園に連れていった時, こんな作品を作り非常にダイナミックな捉え方. 手足を大きく力強い表現をしていたので, 瞬間それを思い出した. (後向き?) 背中の中毛じゃないが, 頭からずっと何となく. 前向きに見てもよい. どちらでもという感じ, 今は. 毛の感じこのへん. 足, 何となく力強い.

1. W FcFM (A) 1.5

Ⅴカード (カードを自分でとる) 10秒. 逆から見ればチョウのような感じだが. この方向だとやはりコーモリのようなんでしょうか. 他に何も見えませんが. 30秒.

〔質疑〕 アゲハチョウ. 触角 (d_1) とハネ. 後バネがないですけど.

飛んでる時, こんな姿で飛んでる. ネズミのような顔をしてる. かわいいんです. 捕まえてみるとあどけない感じがするのだが.

1. W F A P 1.5

2. W FM A P 1.0

Ⅵカード 25秒. 何も浮かばないが. まん中の線が開いた瞬間, バイオリンの弦のように見えた. 何にも出てこないが. 60秒.

〔質疑〕 瞬間に楽器のことが浮かんだ. 何か今, 三味線の, どういってるか知らないが上の方, こんな感じになっているでしょ (D_2). 下, たしか四角だったと思うが.

1. D F obj 1.0

add.1. D F obj 1.0

Ⅶカード 20秒. あおう, セトモノで作った子どもの人形. 頭の大きい, そういう感じが上の方ですが全体からは何も. 何も浮かんでこない. 60秒.

〔質疑〕 顔 (D_3), 手を後にやって坐ってる (D_2). これ (D_1) は別に. この上に乗っかってもいいんです. よく陶器でこういう小さい物, 頂いたことがよくある. ある業者から. 店ざらし. 陶器でないという感じ, 首が細く安定性を出すことは, 他のものでは無理と思う.

1. W M (H) 1.5

Ⅷカード 25秒. 全体から何も感じないが. 両端からネズミがぶら下ってる感じですが. なんかイタチのようなそういった種類のものが. 後は何も感じないが. 60秒.

〔質疑〕 こういう色彩あまり好まない. 色彩が嫌だなと思った.

1. D FM A P 1.0

Ⅸカード 15秒. 下の方だけ見て. 小さい赤カブラというか. 小さいそんな感じだが. 上の方を見ると何も出てこないいうんか. 何も感じないが. 1分15秒.

〔質疑〕 赤カブラ (D_0). 緑のハッパ (D_1). 別に理由はないが, 特殊学級の子がこういう絵を描かされてる. よく赤カブラが題材になっている. 描きやすいからか, その推移を発表する先生が何人かあった. 特殊な描き方するなと思いつつ見たので. しいて何ということもない.

1. D FC Food 1.5

Xカード 30秒. 全体から何も感じないが. まん中の赤いのはちょっとタツノオトシゴに似てるなあと. 上の黒いのがマンガに出てくる, 何かどういうんか, コビトのギャング. 子どもがよくこういう絵を描くような気がする. 何も出てこない (笑). 1分50秒.

〔質疑〕 そういう形してないでしょうか. 無気味な感じ, 何となく. 無気味というか落ちつかないというか, 統一がないような感じです.

マンガ的. 何となくよくこんなで戦争か何かと. これとこれ対称のそれだけで. (ギャングとは?) 別にギャングでなくてお祭的なものでよい. 何かをかついでいるような, そうでもない. こじつけたもので大して大きい意味はないが.

1. D F A 1.0

2. D M (H) 1.0

量的整理

R : 14, T : 9'25", T/R : 40", T/R_{1a} : 15", T/R_{1c} : 18", W : 9(64%), D : 5(36%), M : 3, FM : 5₊₁, F : 4₊₁, F_c : 1, FC : 1, (H) : 2, A : 8, (A) : 1, obj : 1₊₁, Food : 1, At : 1, P : 7, F% : 29, A% : 64, M : FM = 3 : 5₊₁, M : $\Sigma C = 3 : 0.5$, (FM+m) : (F_c+c+C) = 5 : 1, M : W = 3 : 8, F : (FK+F_c) = 4 : 1, (Ⅷ, Ⅸ, X)% : 26, FC : CF+C = 1 : 0, (H+A) : (Hd+Ad) = 11 : 0, FL : 1.20, 継起 : rigid, most disliked : Ⅱ (別に理由はないが何となく嫌な感じ), most liked : なし (しかし一番ましなものはⅧ, おだやか)

4. 解 釈

I 量的分析

(1) まずR : 14はやはり低い反応数である. しかもIカードの三つ, Vカードの二つの反応はいずれも似たようなPであり, 他の被験者ならそれぞれ一つの反応に纏めたかもしれない. だから14という数はさらにわり引きして考える必要がある. Rの低下についてはいろんな理由が考えられるが, とくにこの際考慮すべきことは, この被験者の緊張がかなり高かったかもしれぬことである. というのは, 現実的な問題もからんで, このテストの結果について被験者の関心が相当大きかったからである. 多かれ少なかれテスト場面は日常場面と異っており, テスト結果がそのま

ま被験者の本来の状態を反映していないことがある。しかし、人間とはつねにそのつどの状況に反応しているのだから、どういう場面が最も典型的なその人の反応を引き出すのかは誰にもいえない。むしろ、特定の場面の特定の反応からより一般的なありようを推測するのがこのテストの狙いなのだ、というべきであろう。しかし、テスト状況がその時の被験者にどのような意味をもっていたか、できるだけキメ細かく弁えておくことが、テスト解釈に不可欠であるのはいうまでもない。

さて被験者の14の反応のうち、半分の七つがPである。Pは多くの被験者の示す最も普通の反応で、それ程の努力なしに出しやすい反応である。いわば間違いのない反応で、自分をさらけ出すのを好まない被験者が、しばしば多くのPを出す。だからRが少ない上にPが多いというのは、知的に問題のない場合、この被験者ができるだけ無難にテスト場面をきり抜けようとしていたものと考えられる。こういう態度が、テスト場面だけのものかさらに一般化できるものかは、この段階では何ともいえない。

さらにA%：64もかなり高い値である。左右対称というロールシャッハ図版の特質から、動物反応は最も出しやすい反応といわれ、その点Pに通じる所がある。又コンテンツレンジはAとHを含めて5である。この人の興味の巾はごく限られた狭いもの、ということになる。形体水準はすべて1.0から1.5レベルであり平均は1.20である。これもまったく平凡な知的レベルを示唆し、被験者の経歴ないし家族の職業とはつりあっていない。継起はrigidで場面に対する柔軟な対応が難しく、かなり機械的紋切り型の反応態度が身についている可能性が大きい。反応時間および初発反応時間についてはやや遅延気味ではあるが、とくにいう程のことはない。

W%は64でかなり高い。Wには未分化であいまいなものから明確な部分知覚を全体に統合したものまであり、それぞれに違った意味をもっているが、このプロトコルのWはほとんどがPレベルのものである。それにもかかわらず図版の全体に反応しようとする態度は、場面の意味をことごとく読みとろうとする積極性ないし“野心”を表わしている。この人のDは、VIカードとⅧ、IX、Xカードにだけである。いわゆる陰影カードと全彩色カードであり、それなりの理由があると思われるのだが、それについての考察は後に譲り、ここでは、この被験者の基本的なアプローチが強いW傾向を含んでいることを指摘しておきたい。

又、W：Mの比率は日本人としてもW過多の気味があり、この人のW傾向がこの人なりの内的エネルギーを上回る程のものであり、それだけやや強迫的なニュアンスをもつことを思わせる。D%が36であるから、物事を具体的現実的に把握するよりも、無理にでも抽象的観念的に把握しようとする傾向が強いのであろう。しかもその結果は、すでにのべたようになんか陳腐ないわゆる紋切り型反応が多く、W反応に関してみられるように、一方で相当“頑張って”いながら、R、P、A%、CRなどではかなり緊縮した傾向がみられる。これを何らかの防衛機制、つまりできるだけ本音を見すかされまい、ボロを出すまいとする態度と考えれば、ある程度了解することができる。この推測の妥当性は後にも明らかになるが、とくに同時に実施したTATによって内容

的にさらに確かめることができる。

なお、このプロトコルでDd%は0である。この人が細部にこだわることはほとんどないと考えてよい。そのことは $(H+A):(Hd+Ad)$ が11:0であることにも現われている。たえず全体像を把握しないと安心できないということであろうか。ただしW反応の中にd部分の言及が欠けているわけではないから、細部に対する配慮がまったくないのではない。いずれにしろ、こうした面がこの人のW傾向と関連しているのは明らかである。

(2) ところがこの人のF%は29である。もともとFはいわゆる即物的反応といわれている。つまり、物の形はわれわれにとってすでに与えられたものであり、われわれが恣意的に変えることはできない。だから、ある物を形からその物として知覚するためには、まずその物の形を覚えこんでおかなければならない。従ってFは、客観世界をありのままに受け入れる態度、いわば世界に自分を合わせる姿勢を反映している。そのことは現実適応に極めて重要な一面であるが、自分を生かす面が失われるのでそれだけでは適応的といえない。そこでバランスが問題になるのであるが、27%という値が低すぎるのである。外界を客観的に受け入れることが難しく、主観的な要因にふり回されている可能性が大きい。(1)でみたように、この人の基本的態度はおそらくかなり防衛的で緊縮したものである。その場合、当然F%の高いことが予想される。それが逆であることは、この人の防衛機制にかなり無理のあることを思わせる。それだけ緊張が高くだからこそ一そう緊縮的になる、ということであろう。表面当りさわりのない平凡な態度の裏に、相当な緊張が隠されているのである。ただしこの人の反応は、F以外のものもすべて形体優位の反応であり、形体水準もまずまずである。だから、そのためにこの人の防衛的なありようが崩れるわけではない。これをTATの所見と照らし合わせれば内なるもの(肉体性)の突出と形体性(この場合精神性)との葛藤として捉えることができよう。もちろん今までのロールシャッハ結果だけではそこまで考えることはできない。

(3) ところでこの人の運動反応はM:3, FM:5₊である。反応数の半分以上が運動反応ということになる。運動反応とは、もともと動きのない図版に運動を見るのだから、Fに比べるとかなり主観的な反応ということになる。つまり、もちろん図版に触発されてのことではあるが、まず何らかの身体感覚が被験者に生じそれが逆に図版に投射されて、「動いている」という知覚が生ずる。だからこうした身体運動感覚なしに生じた運動反応は厳密には運動反応でないものであり、同じ反応でも諸家によってFとされたりM又はFMと分類されることがある。ただ筆者は反応の分類そのものを極端には重視していない。というのは、分類しにくい反応というものはそのままその反応の特殊性を表わしており、しいてそれを分類することでかえって反応の意味を見失うのではないかと思うからである。もちろん量的分析のためには何とか分類せざるをえないけれども、解釈に当っては元の反応の微妙なアヤを再び組みこむべきだと考えている。

いずれにせよ、運動反応がまず主観的な身体感覚から発し、それに基づいて図版を意味づけたものであることは間違いない。これは、Fがいわば世界に自分を合わせる態度を反映するのに対

し、世界を自分に合わせようとする態度である。われわれはかなりの程度客観的な世界をうけ入れざるをえないのだが、同時に、そこに主体的な自分の感じを多分に投射してもいる。世界を灰色に感じたりバラ色に見たりするのは、必ずしも客観世界が変化したからではなく、主体のありようが客観世界を違った風に彩るからに他ならない。だからこの場合、必ずしも客観的条件が十分である必要はなく、いわば一種の内的エネルギーが外界に向って働いているのだ、と考えてもよい。だとすれば運動反応とは、そのような内的エネルギーが図版に触発された結果生ずる、と考えることができよう。運動反応に内的資質の豊かさが見られるといわれるゆえんである。

もっとも一口に運動反応といっても、たとえばクロッパ―ではM, FM, mの三つのカテゴリーがある。こうした下位分類が必要かどうかは問題のある所であるが、筆者は一応クロッパ―の分類に従っているし、それなりにこうした分類には意味があると思っている。ごく大ざっぱない方をすれば、Mは、今までのべたような内的な感覚を人間的レベル、すなわち自分のものとして、従って ego-syntonic なものとしてうけとめている場合に生じ、それだけ自我によるコントロールが可能である。FMは、それが動物に投射されているのだから、人間、従って自分のものとしては感じられていない。そのためどこかで感じられてはいるがエゴからは遠く、それが意識されるのは他人の中にその働きを見る場合である。文字通り project されやすい内的な動きということになる。mは、たしかに内的な動きとして感じられてはいるのだがエゴとつながらぬ、いわゆる ego-alien なものとして意識されている動きを表わす、というのが現在の筆者の仮説である。

そこでこの被験者の場合であるが、すでにのべたように、Rの総数に比べて運動反応の数が多すぎるのである。F%の低さも考え合わせて、この人が周りの世界を自分なりに意味づけるタイプの人であることが判る。ところがこの人のM:FMの比率は3:5₄₁であり、FMがざっとMの倍ということになる。それは大体 optimal の範囲であるが、Mの内容がAと(H)二つであることを見逃すわけにはゆかない。いずれもマンガ又は陶器の置き物である。だからMはMでももう一つビビッドな運動感覚が殺されているわけである。それだけFMないしFに近いMと考えてよい。だからこの人の場合、内的な動きが自分自身のものとしてよりは、他人に投映される可能性が大きいと思われる。

運動の内容も、Mでは挨拶、坐っている、ギャング又は祭りであり、纏った動きを示していない。FMについても、飛ぶ、力強い足、ぶら下る、というものである。踏みしめるべき大地もなく飛翔する翼もない中途半端な状況が、一つ混っていることになる。MとFMの運動の方向をみることによって多くの知見が得られるという Piotrowski (1957) の見解に従えば、この被験者の場合、両方の動きは対応しているようにみえる。つまり、ギャングないし祭りという非日常的なものと飛ぶこと、挨拶という型にはまったあり方と足、坐っている姿勢と宙ぶらりんという組合せである。従って内的な動きに対するこの人の意識的・無意識的な把握の仕方に大きなズレはないことになる。しかしどちらかといえば、エゴのコントロールの届きにくい所で主観的な知覚が

生じ、それによって周りの世界を意味づける傾向が強いと思われる。

もちろんこうした内的な意味づけが、もっぱら主観的レベルにおいてのみなされるわけではない。知覚とは内界と外界の相互作用を通してはじめて成り立つものであるから、外界に対する現実吟味を忘れることなく、内的なものがどう外界にかかわるかが問題なのである。ここで、M : ΣC の比率が3 : 0.5であることは、この人が、対人関係の場でほとんど自分を出せないことを示している。色彩反応についての考察は(5)で行うのでここではのべないが、それがスムーズな人間関係、容易に場の雰囲気や溶けこめるありようを反映していることは指摘しておきたい。今日、ロールシャッハ自身が重視した程に体験型の意味は評価されていないけれども、臨床的にはまだまだ有効な指標ではないか、という印象が私にはある。というのは、Mおよびその他の運動反応が色彩反応に比べて著しく多い時、その人の対人関係の障害が予想されやすいからである。

つまり、色彩が運動につりあっている場合、被験者の内的な動きはそのまま外的な客観世界に表現の場をもつから、内外の相互作用がスムーズである。しかし色彩反応が少ないことは、内的エネルギーが客観世界に生かされる場のないことを意味している。そこでこのエネルギーが逆流すると、いわゆる自意識過剰の現象がひき起され、対人関係が一そうスムーズでなくなることが多い。

これについてももう少し詳しく説明すると、ロールシャッハテストでみる場合共感性には二種類あって、一つはMによって、もう一つは色彩によってみることができる。Mによる共感性とはいわば主観的な共感性である。つまり、もしあなたのような状況に置かれれば自分は多分こう感じる、だから今あなたの感じている気持はこうなのだろうという、まず自分の実感をもとにして相手の気持を判る感じ方である。それだけに当たった時には、時に当の相手よりも深く相手の気持を捉えていることがある。心理治療やカウンセリングでいう共感とはほとんどこれである。しかしそれらのことについては別の機会にのべた(氏原1974)ので、ここではこれ以上ふれない。色彩による共感性とはそれに対して、対象との一体感、たとえばすぐれた芸術作品に接した時に経験するおのれを失うような感じとかかわりがある。対人関係では即座的な感じあいということになる。もちろん共感にこの両面は不可分なのであろうが、ロールシャッハテストからみる限り、こうした二つの次元に分けて考えるのが便利である。

ところで、Mによる共感とは主観的な実感が基になっているだけに、時に独断的な独りよがりになり落ちこむ危険性がある。だから、C的な共感と重なりあう必要がある。しかしC的な共感とは、すでにのべたようにそれが場面に溶けこむ感じに他ならないのだから、実際の対人関係を通してしか経験することができない。Cがないということは、こうした外の世界との相互作用のないことを意味する。その場合だからM的な共感とは、まったく主観的な観念のレベルで堂々めぐりするよりになるのである。そこでああもしたい、こうもしたいといういろいろな事前に想像しても、又、逆に想像しすぎるがゆえに、現実の人間関係はかえってギクシャクしたものになり易い。そして、その折りの相手の何気ない動作やことばがさらに疑心暗鬼の種になる。これがいわゆる自意識過剰で、内心、

他人とのスムーズな関係を望みながら、現実には失敗が多く身動きならなくなってしまうのである。最悪の場合には、妄想的な思いこみにまでなりかねない。

こういう人はだから、そうした内的経験を何らかの客観的なものに移しかえて、それを意識化する工夫が望ましい。たとえば、芸術的な創作活動を行うとか、宗教的なシンボルのレベルでそれらを客体的に把握するとかの方法である。この被験者が修道尼であることは、その意味で一つの適応方法ではあるのだが、このようなタイプだから修道尼になったのか、修道尼になったためにこうした態度が固着したのかは何れとも決め難い。又、宗教経験ということになれば、超越的経験としてのmがあってもよさそうに思われるがそれもない。

いずれにしろ、この人にとって対人関係にかなり問題のあるのは明らかであるが、さらに問題になるのは、さきにも指摘したように、三つのMがそれぞれAと(H)を伴っていることである。つまりこの人には、そのM的共感を人間のレベルで感ずるのがどうやら難しいらしい。それが対人関係において実感の伴わぬ紋切り型の対応を促し、一そう関係をそっ気ないものになっているものと思われる。

(4) ところで、この人の対人関係の問題についてもう一つ考えておかねばならないことがある。それは陰影反応が一つしかないことである。Klopfers(1954)の愛用する指標に $F:(FK+F_c)$ があるが、これが4分の1以下では愛情欲求がそもそも異常な程に未発達か、その抑圧が強すぎるかのどちらかだ、というのである。この被験者の場合この比率は4:1でギリギリの所でoptimalの範囲内に入っているが、この F_c は、同程度の決定因がいくつかある場合は運動反応を優先させるという原則に従えば、実は副反応としてスコアされてもおかしくない反応である。陰影反応については、現在なおスコアリングのカテゴリーすら諸家によって一致していない程であり、したがってその解釈仮説もまちまちである。今の所筆者は、それが基本的安定感と関連しているのではないか、と考えている。

すなわち材質反応が身体接触レベルの愛情欲求を、奥行反応はego boundary成立以前のそれを反映しているのではないか、ということである。だから、材質反応の方を発達的には後の段階のものと考えてるのである。対象の感触を感じとるためには、少なくとも自分の皮膚と対象との接触感が必要であり、その場合、自分と外界との境界としての皮膚感覚が不可欠であろう。それに対して奥行反応の場合には、一種の胎内復帰状況のごとき自他未分化の一体感、したがってKlopfers(1954)のいう大洋感情に近い感覚が反映しているものと思われる。

いずれにせよ、もっぱら受身の状態で周囲がどれだけ配慮してくれるかが、そのまま自らの生存につながる時期の感覚である。それは100パーセント依存的な状況なのであるが、それがそのまま周囲への期待ないし信頼感につながっている。エリクソン(1973)の精緻な分析をまづまでもなく、そのような外界への信頼感が、自分はこの世界にうけ入れられているという感じを生み、やがてそれが基本的安定感につながるのである。

だからこの被験者の場合、陰影反応が一つしかないことは、自分の中の依存感情が十分に意識

されていないことになるが、そのことは以上のべたような意味で、他者に対する信頼感が十分に育っていないということに他ならない。これは、それだけ依存心が少なく自立心に富んでいることでもあるから、必ずしもつねに悪しき傾向ということとはできない。この人の場合にも、当然プラスマイナス両方の意味で作用しているはずである。しかし人を当てにしない冷たさが、(3)でのべた対人関係のまずさに拍車をかけ、この人の孤立的ないわば人嫌いの傾向を一そう強めていることは否めない。とくに、過剰な自意識からあれこれ思いこむ内容が、他者に対する否定的な色あいをおびる可能性が大きいので、単にひっこみ思案というにとどまらず、かなりの傷つきやすさが予想され、それが人間関係を通して解消されないとすれば、一種のルサンチマンとして蓄積されている可能性が大きい。

又、後に継列分析において考察することであるが、たとえばVIカードではじめてW傾向が崩れてDが出ていることなどから、陰影への sensitivity はかなりあると考えられ、それにもかかわらず陰影反応の少ないのは、そこに一種の抑圧の機制が働いていることが考えられる。だとすると、潜在的な依存感情は終始欲求不満にさらされているわけで、前述のルサンチマンはさらに大きくなり、一種の悪循環の生じている可能性が強い。これらの事情は、前にものべたように、T A T において一そう具体的に現われている。

(5) 色彩反応についてその passivity を強調したのは Shapiro (1965) と Schachtel (1967) である。色彩反応とは、Schachtel のことばを借りるならば、外からの刺激に対して、それが何であるか知覚する以前にすでに主体が動かされている状態、を反映している。知覚とは何かの問題をここで大上段に論ずる余裕はないけれども、われわれが「いま・ここ」の経験をそれ自体としてうけとめることはなく、Combs や Snygg (1959) のいう phenomenal field にうけとめてそこで意味づけるプロセスのあることは認めねばならない。つまり、ある特定の刺激が直接的にある反応をもたらすのではなく、一たんそれぞれの現象的場、つまり内的な枠組の中に位置づけられ価値づけられた後に反応が生ずるのである。その結果「いま・ここ」でいかにあるべきかという心的志向性が生じ、そこから人間における主体性が問われるようになる。M 反応によって示される知覚のありようには、そうした主体的側面が強く反映していると私は考えているが、同時にそのような反応からは、経験の直接性ないし即物性が失われやすいのである。

色彩反応はちょうどその逆になり、その特色は、自我の介入する余裕のないこと、文字通り“我を忘れた”経験の直接性ないし無媒介性にある。これを一言でいえば、知性を通さぬ感情的経験ということになろう。これは対人関係では、自発性とか暖かさとか柔軟性となって表われる。場面の雰囲気に乗って軽やかに渋滞することがない。その点生命感に溢れたありようということができよう。ただし、それだけでは方向性に欠けることを否めない。

ところでこの被験者の色彩反応はIXカードでのFC一つである。反応数が少ない上に形体優位の反応でもある。だから対人関係にスムーズさを欠き、運動反応の優位ともあいまってこの人の人間関係がかなりぎこちないものであろうことはすでにのべた。しかし、感情的に動かされても

社会的に許された枠組で処理することは、陰影反応の際にみられたのと同じパターンである。(Ⅶ, Ⅸ, X) %も26で、彩色カードに対して、ただでさえ低い生産性の落ちていることもこの人の情動場面での反応性の弱さを思わせる。

しかしⅥカードを除いて、この人のD反応はすべてⅦ, Ⅸ, Xカードに集中していること、逆に、これらの三枚のカードでWがまったく出ていないこと、さらにⅡカードのWが、実は二つのD反応とも見られることなどから、この人が色彩カードで本来の反応パターンを崩しているのは明らかである。おそらくこれはカラーショックの結果であろう。カラーショックとは、色彩に対する何らかの違和感からスムーズな心的機能の障害された結果生ずる。それは否定的な表われ方であるにしろ、色彩に対する被験者の感受性の少なくとも弱くはないことを示している。

すでにみたように、この人にはW傾向が強い。一般にW反応は、全体を総合的に捉えようとする抽象的知的な努力を反映する、といわれている。それに対してD反応は、図版の中の比較の見やすい纏った部分を取り出して反応するのだから、それだけ具体的即物的したがって現実的な態度を表わす、という。とすればこの人は、全彩色カードに圧倒され、ある程度視野を狭めることによって場면을現実的に処理したことになる。その場合、形体水準は崩れていないのだから、そうした対応が失敗したとは認められない。だから、多少の困惑はあったにしろ、情動刺激のために現実吟味能力が低下してとり乱すようなことはないのである。

しかし、三つのカードすべてにショックがみられたとすれば、この人の色彩への感受性は並々ならぬものと考えられる。するとここでも色彩反応に対する何らかの抑圧がある、と考えてよいかもしれない。つまり、陰影にも色彩にもそれなりの感受性をもちながら、ことさらにその動きを抑え、もっぱら運動反応および形体優位の反応で対処してゆくということである。このことはTAT反応に、精神性と肉体性の問題としてかなり具体的に現われている。「どのように見るか」のロールシャッハと、「何を見るか」のTATの、それぞれが確かめようとするパーソナリティのレベルの差から、より豊かな全体像を描き出さう一例かと思われる。

もう一つ、この唯一の色彩反応の内容が食物であることは注目に値する。食物反応をもし口唇欲求と結びつけることができるとすれば、この人の情動が口唇欲求の安定をめぐる触発され、しかもそれに対する強い抑圧があることになる。口唇欲求はとり入れの時期における依存愛情欲求と考えてもよい。するとこの人は、甘えの欲求充足にかかわる何らかの外傷的な経験のため、それを抑圧してしまったのかもしれない。(4)でみたように、この人には依存欲求の抑圧が顕著である。だとすると依存—独立のある時期に、ことさらに独立を志向せざるをえないような事情がこの人にあったのかもしれない。それが必ずしも口愛期における外傷ではないにしても、である。つまり、余談ながら筆者は、口愛的な問題がつねに口愛期に直接的な原因をもつとは考えていない。というのは、口愛的問題は発達の中の時期においてもありうるものであり、むしろそのつどの現われ方、対処の仕方を考える方が臨床的にはより有効な態度と思っているからである。

(6) ただし、全般的にとくに偏った反応や形体の崩れた反応は一切ない。だからここから病的な

所見は見出されないが、全体にかなり緊縮的な傾向がみられ、この人の本来持っている能力が十分に生かされていないのは明らかである。いわゆる表面的にソツなく過すことはできようが、基本的に対人的な信頼感に欠けており、その人間関係は暖かみと深みに欠ける。自分なりの物の見方はハッキリしており勝ち気である。そのため時に自身の立場を依怙地に固執することも考えられる。しかし、シンには甘えの気持や親しみの感情が秘められており、これにどう対応するかがこれからの課題であろう。今まで通りのとりすました生き方を続けるだけの強さもあるし、ここで、今まで抑えてきたものをとり入れてゆくこともできるかもしれない。ただしその場合は、いわゆる防衛の壁をとり払ってゆくことになるから、若干の動揺が予想され、おそらく専門家の介助が必要と思われる。今後のあり方を考えるためにテストをうける気になったというのは、十分頷けるところである。

5. 継列および内容分析

I カード 第Iカードの第1反応に平凡反応を出せるか出せないかは、未知の場面でどれだけ普通にやれるか否かの指標として、筆者はかなり重視している。この人の場合、その条件は満たしているのだが続く二つの反応がいずれも同じ基礎形体をもつPであることは、量的分析でみた“がん張り”が生産性への野心として現われ、できるだけ本音を表わすまいとする態度が、陳腐な反応の羅列に終らせたのであろう。第1反応について、「前の修道院で……」という言及のあるのは一種のself referentであるが、むしろ自分の反応の正確さを経験的事実によって裏づけようとする態度の表われで、験者に対する強引な押しつけと、何か保証がないと安心できない気弱さとが共存している。「しいてこじつければ」とか「想像力がないから」というのは、この被験者のテストに対する遊びのなさを示しており、一見卑下しているようでありながら、反応に対して全面的に責任を負うのは避けようとしているわけである。こうしたアンビバレントな態度が、結果的には表面的でありきたりの人間関係を作るのであろう。なおd部分についての言及もあり、この被験者があいまいなWしか出せぬことのないことを示している。三つの反応とも「飛んでいる」反応でありやや外拡的な印象がある。

II カード おそらくテストプロパーでは漠然とWでAtを見たのではないか。それを質疑段階で胸と腎臓として形体的に纏めたような感じである。どちらを強調するかでWかD二つかになる。解剖反応は、この人の場合とくに、見られるべからざるものがさらけ出されている無防備の感じを示しているように思う。とりすました表面的なマスクの背後にある暖かい人間関係に対する秘かな憧れが、量的分析でみたカラーショックを生ぜしめ、それが0.5レベルのWになったのだと思いたい。しかし、質疑段階でそれを二つのDに纏め、形体的にも崩れから立ち直っている。色彩に対する感受性と共に、それに圧倒されてしまわないしたたかさを思わせる。第1反応の「別に線は入っていないが」というのは、陰影を感じていたのかもしれない。しかしそれを形体反応でさば

いているのは、少々の内的動揺にもかかわらず、社会的には適応的な行動をとりうることを示している。しかし、このカードが *most disliked* に選ばれているのは、この人の姿勢が多かれ少なかれ崩されたからであろう。

Ⅲカード Mであるがマンガの擬人化されたトリという。内的な運動感覚が次第に現実から遠ざかってゆく。ということは、それだけ共感（M的な）の伴った人間関係をもちにいき、ということである。運動の内容が「挨拶」か「仕事」というのも、そうしたこの人の表面的な動きの反映かもしれない。見逃してならないのは、この人がこの人物を「男のようでも女のようでも」と言い、スカート、ハイヒール、蝶ネクタイなどを指摘して、部分的にはそれらを男のものの女のものと判断できるのだが、全体としては男とも女ともいえていないことである。それはおそらく、女性としての実感、したがって *sexual identification* が明確でないためであろう。もちろんそうした女性々に対応する男性々の実感も薄いから、男性としても定位することができないのである。コドモのマンガという無性的な知覚は、そのような性的同一化を回避している可能性がある。

この男性々、女性々をそのまま精神性と肉体性におき代えるならば、量的分析およびT A T所見から考えられる葛藤のため、ここで被験者が図版を男女いずれとも決め難かったことは、ある程度領けることである。

Ⅳカード これもコドモの絵であるが、一つにはⅠカードと同じく、経験的事実として反応の正確さを保証しようとする事と、もう一つにはⅢカードと同じく、自分にとってうけ入れ難いものを無生物化しようとする試みと思われる。このカードは、Beckら(1967)によって父親カードとされており、そこで見られたものが父親ないし父親的なものに対応しているという。したがって、被験者にとって男性的権威はゴリラのイメージをもっていることになる。ゴリラは猛獣であるが、ここでは後向きであり脅威的な感じはないが、それだけ直面しにくいのだとも考えられる。しかし質疑段階では前向きでもよいといい、一息入れることで正面から見る事が可能になったのかもしれない。「力強い足」はしっかり大地を踏まえており、むしろ社会的権威に対する肯定的な同一視がみられるようである。又、唯一のF₆がここで出ているのは、男性的権威的なものとの身体接触への秘かな願望の表われかもしれない。そこに若干の性的ニュアンスが含まれている。うがった見方をすれば、それが父なる神の懷に抱かれたいとするこの人の信仰とどこかでつながっている可能性がある。いずれにしろ、この人に権威に対する甘えのごとき感情が隠されているのは確かのようなのである。だからこそ、それはコドモの絵でないといけなかったのであろう。

Ⅴカード 第1反応はカードはA方向のままチョウはC方向に見るという、やや無理な見方をしている。しかしPであり、無理を通して崩れぬだけのこの人らしい強さが認められる。「後バネがない」というのは、今までにもみられた正確さの強調である。このカードは自分でテーブルか

らとり上げた。コーモリ——ネズミをあどけなくてかわいいというのも、験者の与り知らぬ経験に基づいており、やや押しつけがましい印象をうける。運動反応過剰型の一種の強引さの出たカードである。

Ⅵカード このカードでは第1反応に今までの倍の時間をかけ、最初のDが出た。カードによる何らかのショックがあったものと思われる。このカードは陰影カードであると同時にセックスカードでもある。そのショックがどちらに由来するものかは判らないが、おそらく両方共が多かれ少なかれ影響したのであろう。まん中の線の指摘は、viginal area のまっ只中でのおそらく陰影部分の回避である。音楽は情緒性を表わし、バイオリンはさらにその積極化を示すとすれば、そこに昇華のプロセスを認めることができる。Ⅳカードで男性々への身体接触要求が信仰に高められている可能性を示唆したが、ここにみられるパターンも同じことである。

しかし、楽器を女体として考えれば、弦はそれを奏でるものであり、たくまづして性的な反応を生み出している、ということになるのかもしれない。それはそのまま、この人の肉体性情緒性の受容の可能性を示してもいる。しかし図版の主要部分、いわば肉体部分の回避されていることから、それがまだ意識から程遠いことは考えておかねばならない。唯一の付加反応もやはり楽器であり、領域は phallic area である。この人は、自分なりに多少とも動揺を感じた時には、それを絵とか置き物として距離をおくのであるが、このカードでそうした方法は一切使われていない。本人としてはまずまずの反応ということなのであろう。ここでの被験者の混乱はしたがって“objective”なものであり、“subjective disturbance”よりは深刻、ということになる。

Ⅶカード これもMであるが安物の陶器という。ⅢカードのMがマンガであるのに通じている。又、コドモの人形といい性別にはふれていない。好きなカードはないがこれが一番マシ、おだやかだからという肯定的評価と、「安っぽい店ざらしの」というコメントにはこのカードに対するアンビバレントなニュアンスがある。反応に陰影がかかわっているかどうかについても、この姿勢で安定を保つには陶器でないと、と否定している。これは折角の人間運動反応を、陶器のもつ不動性によって完全に殺してしまっていることでもある。

ここでも「頂いたもの」という過去の経験がひき合いに出されているが、これは今までのそうした反応も含めて、今の感じ、図版に対しての実感を否定して、過去の、つまり自分なりの枠組を強調する姿勢の表われであろう。量的分析における運動反応の強調、Ⅴカードで自らカードをとったりする態度に通じている。一方で弱気な所をもちながら、できるだけ自分のイニシアティブを失うまいとする傾向である。そこから、この人が色彩に困惑すること、自由に感情に身を委し難いことが頷ける。このカードを母親カードとしてみれば、以上のべたことはそのまま母親に対するアンビバレントな態度の表われかもしれないが、ロールシャッハテストからだけでは何ともいえない。

Ⅷカード 量的分析の項でのべたように、これ以後W反応はなくすべてDである。「こういう色彩、好まない」というコメントは、そのまま subjective disturbance、つまりこの人自身が、全彩色場面で困惑しているのに気づいているわけである。それはとりもおさず、感情的な人間のかかわりに対するこの人の嫌悪感の表われでもある。「ぶら下っている」というのは、文字通り進むもならず退くもならぬ必死のあがき、といってよいかもしれない。しかもネズミは、Vカードのコメントにもみられるように、この人には親近感があり、いわゆるセルフイメージと考えてよいかもしれない。しかし反応自体はPであり、この人の姿勢が崩れたわけではない。

Ⅸカード ここで唯一のFCが出ている。そして又しても絵、過去経験の思い出である。「しいて何ていうこともない」というのもこの人らしい調子である。特殊学級の子どもの絵というのは、おとなである自分ならそうは描くまいといった、口愛的反応に対する一種の抵抗があるのかもしれない。

Ⅹカード 第1反応で「そういう形していないでしょうか」と言うのは、一方でそう見えるはずだという押しつけがましさと、検者、つまり権威による保証を求める弱さの同居するこの人らしいパターンである。ついで、「何となく無気味、統一がない」というのは、Ⅷカードと同じsubjective disturbanceである。しかしそのような不適合感を自覚するというのは、それに対応する手段をとりうることを意味しており、たとえばⅥカードにみられるような、自分としては成功したはずの反応が、実は抑圧されたものをさらけ出している“objective”な場合よりは適応的である。とくに「統一がない」というのは、このカードのもつ動きの感じがこの人を揺さぶったものと思われる。

また第2反応でギャングか戦争といているのは、この人の中の秘められた攻撃性の表われかもしれない。ここでもコドモのマンガという例のパターンが現われる。質疑段階ではお祭りにかえているけれども、お祭りは一応協調的な動きであり神につながるものでもあるが、要するに非日常ということでは攻撃性の昇華されたものかもしれない。この人のことばを借りれば、「こじつけたもので大して大きい意味はない」ということなのであろう。しかし、お祭りに表わされるこの人の協調的なあり方が攻撃性を超えた所にある、つまり、どちらもがビビッドで生命感の溢れたありようなのであって、一方を抑えて一方だけを生きることの難しさがおのずから示されているのだ、と考えることは可能である。逆にいえば、攻撃性という否定的な衝動を抑えるために、お祭りの肯定的な気分も壊されてしまっているのだ、といえなくもない。

6. 所 見

いわゆる内向的なタイプで、世界を自分なりの枠組みで見てゆこうとする傾向が強い。しかし感情的に固さがあって生き生きとした人間関係を結びにくい。そのため自分の枠に閉じこもりや

すい傾向がある。人を当てにせぬ自立性が強いのだが、それは対人的な不信感に基づいている。それがこの人に表面的なつきあいしかさせなくしている。しかし常識的、むしろ紋切り型の融通のなさはある。社会的に逸脱しないだけのシンの強さはある。それらは依存欲求なり暖い人間関係に対する望みが抑圧されているためであるが、幸か不幸かこの人にはそうした防衛的パターンを守りぬくだけの ego-strength がある。

おそらくこの人は自発性を肉体的なものとして感じており、それらは攻撃性、性的欲求、依存欲求などとしてかすかに意識されている。そしてこのような肉体性を克服することがこの人の基本的な生活態度なのである。多分信仰生活は、肉体性を精神性の域にまで高めようとするこの人の努力を表わしている。それがこの人を信仰に導いたのか、逆に信仰がこうしたあり方を招いたのかはよく判らない。

一方他者への不信感は、基本的安定感の不足と裏腹のことである。それだけに一そう權威に対する依存感情が無意識的レベルに沈澱している。それをカバーするための精神化でもあるのだが、その背後に単なる不信感にとどまらぬルサンチマンの蓄積されている可能性が大きい。それだけにアンビバレントな揺れの巾が大きく、現在の緊張はかなり強いのではないか。思弁的になるのを恐れなければ、おそらく閉経期に入って肉体性の意識の昂まったことが緊張を一そう大きくしたものである。その点この人が一つの転機にさしかかっているのは間違いない。

ただしプロトコル全体にわたって異常な反応はなく、その限り、現在程度のレベルの適応を保つだけの力はある。抑えられた可能性を生かすべく試みるか否かは微妙な問題である。現在かなりの問題はあるにしても、少なくともノーマルの範疇に属している。

7. 要 約

中年、おそらく閉経期に達した修道尼のロールシャッハテストの解釈例を示した。一つの転機であり、テスト結果はそのことを如実に反映している。それが修道尼という特殊な条件からくるものか、この人の独自のパーソナリティに由来するものかはにわかに断定できない。しかし一般論として、この年令に達した女性の問題性をかなり明確に示しているといえると思う。ロールシャッハテストに対する好意的否定的態度のいかに問わず、実際のテスト結果に基づかぬ限り建設的な論議はありえないという判断のもとに、必要な資料を蓄積するためにこのレポートを報告した。

参 考 文 献

- Beck, S.J. & Molish, H.B. 1967「Rorschach Test II」A Variety of Personality Pictures Grune & Stratton
 Combs, A.W. & Snygg, D. 1959「Individual Behavior」Harper & Row
 エリクソン, E.H. (小此木啓吾他訳) 1973「自我同一性」誠信書房
 Klopfer, B. et al 1954「Developments in Rorschach Technique I」Harcourt Brace & World
 Piotrowski, Z.A. 1957「Perceptanalysis」The McMillan
 Schachtel, E. 1967「Experiential Foundations of Rorschach's Test」Tavistock

Shapiro, D. 1965 A perceptual Understanding of Color Response in Rickers-Ovsiankina(ed.)「Rorschach Psychology」
Wiley

氏原寛 1970 ロールシャッハテスト解釈例 (その1) 臨床心理学研究 vol.9 No.3 52～59

氏原寛 1974 「臨床心理学入門」創元社

氏原寛 1980 ロールシャッハテストの解釈例—投影法の効用と限界— 「心理臨床の実際」 193～204 創元社